



八十八番石仙群



四国八十八番石仏 1 周 5.5km



三十四番石仙群



麻煮釜屋

長野市信州新町信級
信級札所石仏めぐりの会

[illegible][illegible]

四國八十八番
奉納 西國 百番供養

◇信級（のぶしな）の写し靈場巡り

【天こう峯石仏群】＝四国八十八番＝

天こう峯の石仏群は四国八十八番の写し靈場といわれる。88体の石仏は四国の八十八札所の本尊仏の順序に、一番は徳島県の靈山寺の「釈迦如来」から八十八番の香川県大窪寺の「薬師如来」という順序に並んでいる。

文政4年（1821年、今から約200年前）岩下部落の越山八左エ門が先頭になって取り組んだといわれている。自分の家が次々と不幸に見舞われたことを悲しみ、四国八十八か所を巡礼した八左エ門が、四国まで行かない人のためにもと、鹿谷村（旧信級村）の人たちに呼びかけて造営した偉大な事業である。

石仏には本鹿谷村、外鹿谷村はもちろん、新町村、日名村、置原村、橋木村、下川村、上越道村、下越道村、高合村、松川村の寄進者名が刻まれている。

【四十八曲石仏群】＝秩父三十四番＝

信級の藤布月から権田に登る四十八曲の坂道沿いにある。この道は、本鹿谷方面からこの坂を登り権田、棚の川、宇内坂に至り山穂刈通りの街道に合し、美麻から大町に通じる大街道でした。石像が半壊したもの、表面が磨滅して読み取れないものもありますが、秩父三十四供養塔に「安政三辰年八月吉日」（1856年）と刻されていることから、その頃の完成と考えられる。

寄進者の数からみると、信級の本鹿谷、権田の者が44人、他村の人は2人で、四国八十八番と合わせ信級地区の大事業であったことがうかがえる。（信州新町教育委員会刊「信州新町の石造文化財」より）

◇鹿谷（かや）城址のいつたえ

旧信級小学校の裏山全体が鹿谷城であった。城は小学校北西300mの尾根上の絶壁にある。

鹿谷（信級）は室町時代、松崎氏という氏族が鹿谷城を築き領していた。当主は松崎次郎信行と伝える。

信行の先祖松崎氏は大町の仁科氏の支流で、仁科氏と共に木曾義仲の家来であった。1221年（承久3年）に松崎次郎という者が仁科盛遠に従い砺波山（越中、今の富山県）で敗北戦死している。その後、次郎の子信高がこの地の開墾を始めた。この地は肥沃であったので次第に富み、子孫は富豪と成って「鹿谷長者」と呼ばれるようになった。今の長者部落はその屋敷跡という。その後鹿谷城を築き広く一帯を領して、この時は仁科に属していた。松崎氏は更に鹿谷の西方の高地（こうち、美麻村）にまで進出、数十個の集落を従え栄えていた。

文明（1469～1487）の頃、松崎次郎信行は松本の小笠原氏と婚を結び、勢力のあった牧野島の香坂氏に従うようになり、仁科とは相対するようになっていた。

戦いのきっかけは、かの高地（美麻村）。ここは信級の村人たちが開拓し村里をなしたのであるが、ここに仁科氏が「高地は仁科領」として税金を徴収、これに対して信行は「高地は更級」と主張して守兵を置いた。かくして1488年（長享2年）大晦日夜雪の降りしきる中、年とりの酒盛りに酔いしれる鹿谷城の武士は仁科軍の猛攻を受け全滅。信行は殺され、鹿谷の地にて栄華を誇った土豪松崎氏は滅亡したと伝える。

この時の戦死者の霊を弔うため村人が鹿谷城下に作った塚が、大晦日の塚「大年塚」と呼ばれ今に残っている。この塚（塚田地籍）の草を田んぼに入れると稲が枯れるといわれる。

その後香坂氏は仁科氏を攻めて鹿谷城を取り戻そうとしたが、七二会の春日氏のとりなしで「仁科氏の領地は高地及び鹿谷の西部」として和解したそうである。その時の境を今は坂井部落と呼ぶ。そんなことから、坂井から西は安曇の風俗・方言が、東は更級の風俗・方言が残ったのだと伝わる。

◇信級（のぶしな）あれこれ

○麻煮の釜屋

信級の岩下部落に今もあるこの建物は、麻を煮た作業小屋で、戦中（昭和10年代）に集落の人々によって築造された。信級村は、古くから鬼無里村や津和村とともに麻の有数の産地で、昭和40年代まで栽培が行われた最後の産地だった。麻は農家の大事な換金作物だった。八十八夜までに麻種子（おたね）を播き、3mほどに成長した茎を8月上旬に麻拔

（おこ）ぎをして葉を落とし、カラカラに干し、冬になってから釜屋の鉄砲釜の桶で煮る。煮た麻は雪にさらしてから水に浸し男衆が麻剥（おは）ぎをし、女衆が冬仕事に家の「麻搔（おか）き場」で夜遅くまで表皮を搔き落とす作業をして精麻に仕上げた。

釜屋の桶は高さ1.8m、直径90cmで、桶の中の鉄の筒の中で火を燃やすので鉄砲釜といい、野州釜ともいった。かつて信級では、麻煮の釜屋はどこの集落にもあり、水場のそばに作られていた。

信州大建築学科の研究者も「麻の釜屋が保存されている例は全国的にもほとんど無く、貴重な産業遺産だ」と評価している。

○柳久保池（やなくぼいけ）

旧津和村と信級村の境界線上にあり、津和地区では鷹の巣池、信級地区では柳久保池と呼び習わしてきた。面積730a、周囲2.2kmで、三方を急傾斜の山に囲まれた静かな湖水である。

弘化4年3月24日（1847年5月8日）の善光寺地震によって発生した地滑りにより、柳久保川の最上流部の東側の山が幅約500メートル、深さ70メートル、延長900メートルにわたって押し出され、柳久保沢の深い谷を高さ42メートルに堰止め出現した池で、満水には三年かかったという。

滑り出した地盤の上には、当時の柳久保集落18戸があって、滑り出した際17戸はことごとく倒潰、ただ1戸だけが地盤と共に動いて奇跡的に残ったという。（現在は取り壊されて屋敷地のみ）

柳久保池は県内ではシナノユキマスが釣れる池としてよく知られている。

この池の水深は、大正9年（1920年）の資料では41.3メートルあったが、昭和41年（1966年）の調査では35.1メートルになっている。

○當信（たにしな）神社と社叢（しゃそう）

當信神社は927年の延喜式神名帳に搭載されている旧社。信濃国 式内社48座、更級郡11座のうちの一社です。



巨木、古木がまとまった社叢（神社の森）としては信州新町随一。木の太さはいずれも1メートル以上で、最も太いものは周囲4メートルを超える。平成3年6月17日に、杉と樅（もみ）合計25本が信州新町の天然記念物として指定された。町内では、クジラの骨化石（昭和54年に県天然記念物指定）に次いで2例目。その後長野市との合併に伴い、平成22年1月1日に、杉23本、樅（もみ）1本が社叢として新たに長野市の天然記念物として指定された。



国立公文書館デジタルアーカイブより

○奈良尾（ならお）の地滑り

昭和51年10月6日、奈良尾地区ほぼ全域に落差を伴う大きな亀裂が発生し急激に拡大した。日毎に続く亀裂・地滑りによって道路・農地の決壊流出、家屋の倒壊が相次ぎ、奈良尾地区は壊滅状態に陥った。（16世帯、田畑、山林）住民はこの年3月で廃校となった旧信級小学校に緊急避難し仮住居生活を余儀なくされた。翌年52年12月に日原の鹿道地区に完成した奈良尾地区住民用の団地に移転入居した。（国庫補助事業過疎地域集落整備事業で建設、12世帯が入居）

○役（えん）の行者

権田（ごんだ）部落には住民から尊敬を集めた役の行者がいたとのこと。この行者の葬儀には四十八曲の尾根から宇内坂の境まで会葬者の列が続いたといわれている。昭和時代まで権田には「役」という姓の家があった。「役」姓が現代まで残っているのは極めて稀ではないかと思われる。

役の行者は7世紀の役小角を祖とする山岳修験者たちです。修験道は明治5年に廃止され、同29年に廃止令が撤回された。江戸時代には10万人以上の修験者がいたともいわれる。